

総合的自然体験活動の授業実践とその検討(3)

The Learning Effects of Experiences in Nature:
Camping, Flower Cultivation, and Activities at the Petting Zoo (3)

田中 一徳・草薙恵美子・松村 澄絵・野崎 剛毅・結城 孝治・
黒阪 陽一・松田由理子・寺岡真知子・足立 心一

Kazunori Tanaka, Emiko Kusanagi, Sumie Matsumura, Yoshiki Nozaki, Takaharu Yuki
Yoichi Kurosaka, Yuriko Matsuda, Machiko Teraoka, and Shinichi Adachi

はじめに

中央環境審議会(1999)は、「これからの環境教育・環境学習・持続可能な社会をめざして(答申)」の中で、「地球環境は、すべての生命の生存基盤であり、私たち人類はその大きな恵みに支えられてこそ健康で文化的な生活を送ることができる。しかしながら、この限りある地球環境が、人類が与える負荷によってまさに損なわれつつある。このまま人類が、大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会経済活動やライフスタイルを続けると、地球環境に取り返しのつかない影響を及ぼすことは明白である」と現代文明による地球環境の荒廃について示している。このような事態から私たちの生存基盤であるかけがえのない地球環境を将来にわたり存続させるためには、個々人のライフスタイルや意識や価値の変革はもとより、2003年10月に施行された「環境の保全のための意欲及び環境教育の推進に関する法律」にもあるように、「持続可能な社会」を目指し、子ども達に対して多種多様な自然体験活動の場や機会を設け、自然再生事業を担う次世代を育てることが肝要と考えられる(岩本, 2001; 環境省, 2009; 日本生態学会生態系管理専門委員会, 2005)。

一方、2006年に改正された教育基本法では、「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」の条文が明示された。これを受け学校教育法において「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」や第3章幼稚園の第23条「身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと」および第4章小学校の第31条「小学校においては、前条第1項の規定による目標の達成に資するよう、教育指導を行うに当たり、児童の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとする。この場合において、社会教育関係団体その他の関係団体及び関係機関との連携に十分配慮しなければならない」とあるように、自然体験活動の充実が定められている(能條, 2009)。また、自然体験活動の意義や

重要性については、「自然体験の多い小中学生には道德感・正義感の身に付いている者が多く、自然に触れることで学習意欲を喚起される者が多い」、「身近な自然体験も含め、自然の中で活動する青少年が減少している」、「自然体験の多い青少年の中には、道德観・正義感があり学習意欲・課題解決意欲の高い青少年の多いことや、集団による長期キャンプは、積極性や協調性を高め判断能力を育てるといった社会性の育成に効果の高い」ことが指摘されている(文部科学省中央教育審議会, 2007)。

2007年6月に示された教育再生会議第2次報告では、小学校で1週間程度の集団宿泊体験や自然体験・農林漁業体験活動を実施することが提言された(教育再生会議, 2007)。2011年度(平成23年)から完全実施される新学習指導要領において自然体験活動を中心とする長期宿泊活動が位置づけられたことより、文部科学省は2008年度から「自然体験活動指導者養成事業」を全国各地で開催している。このような経過を踏まえて、やや先行的ではあるが長期宿泊を伴う自然体験活動の効果や運営上の課題についても報告されている(井上, 2009; 向後ら, 2009; 自然体験活動推進協議会, 2006)。新学習指導要領における自然体験活動の取り組みは、近年の子ども達の自然体験の減少についての報告(国立オリンピック記念青少年総合センター, 2006; 文部科学省中央教育審議会, 2008)があるなかで、新たな教育活動の場と機会をえる意義あるものと言えよう。

自然体験活動と幼児教育の取り組みとしては、1950年代のデンマークに端を発し、1990年代ドイツをはじめヨーロッパ各地でムーブメントとして普及した「森のようちえん」があげられる(福田, 2006)。日本においては、2005年11月に「第1回森のようちえん全国交流フォーラムinくりこま高原」が開かれ、以後全国各地で毎年幼児教育、保育における自然体験活動実践者の情報交換や交流が実施されている。このような背景もあり近年は、幼児期における自然体験活動の効果や実態調査についての研究報告も増えている(伊原, 2009; 森谷, 2009; 東方, 2005; 山本, 2008)。また、眞野ら(2009)の地域環境や保育方針の異なる保育所に通う子どもを持つ保護者に対する調査報告によると、自然環境が豊かな地域であっても指導者や場所、時間の確保がなければ自然体験が日常的に実施できていないという指摘もある。

2005年文部科学省中央教育審議会では、「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」の答申の中で幼児期における体験活動の必要性和同時に「幼稚園等施設の教員等の今日的課題」として教員等の自然体験の経験の欠如について述べられている。子ども達の自然体験活動をサポートするのは、企画立案から実践、行動できる指導者であり、今後のニーズ拡大に備えて自然体験が実施できる地域の人材をはじめ、大学等の高等教育機関においても教育や保育の考えを基とした自然体験活動指導者の養成は、ますます必要になると考えられる。教員養成機関および保育士養成機関においての自然体験活動の実

践や検証についての研究(前田, 2009; 足立ら, 2009; 西島ら, 2009)や大学生における自然体験の意義や影響に関する研究(松本ら, 2009; 重松ら, 2003)については、近年数多く報告されており、今後も増加する事が考えられる。

このような背景のもと、國學院大學北海道短期大学部幼児・児童教育学科幼児保育コースでは、2006年度より継続して①学生に自然を意識する幅広い視点を獲得させる、②教育、保育に携わることになった際に的確な自然体験活動指導が行えるようにする、③学生自身が自然体験活動をするという3点を大きな目的として捉え総合演習として授業を展開し、実践内容についての検証を行ってきた(足立ら, 2007; 足立ら, 2008)。

本研究の目的は、過去の研究報告の結果を踏まえ、2009年度の「総合演習」において実践した自然体験活動内容および学生の自然体験活動に対する実態を分析することで、本演習の実践内容の効果と課題を検討するものである。

方法

1. 総合演習「総合的自然体験活動」の平成21年度授業及び調査の概要

平成21年度の授業活動全般の実施日程を表1に示す。今年度は川遊びを廃止し、代わりに新たに動物ランド(滝川どうぶつランド)の見学を実施した。各活動の時期は前回活動報告時とほぼ同じであるが、学生数の減少により、キャンプと動物ランド見学はそれぞれ1回の実施で学生全員が参加することが可能となった。

また、これまでに引き続いて本年度も、学生の自然体験に関する背景を知り、さらに本演習の効果を測るため、学生に対して質問紙調査を行った。調査は、自然体験に関する背景や現在の学校生活などを知るための「事前調査」、各活動の感想などを知るための「キャンプ後調査」「どうぶつランド後調査」「草花栽培後調査」、全体のまとめとしての「事後調査」の5回行っている。調査内容は前回報告と同一である。

以下に、それぞれの活動ごとの内容を前回報告時からの改善点を中心に述べ、反省点と今後の課題を示した。なお、前年度と同じ内容については紙幅の都合で省略した。

2. どうぶつランド

(1) 活動の変更

2008年度まで行ってきた「川遊び」の活動は、08年度1年次に、オープンキャンパスの高校生も参加する形で授業を行ったため、本年度は中止とした。今年度は新しい試みとして、学生たちの小動物への興味関心を引き出すことと、子どもの気持ちに寄り添いながら指導力も備えた保育者養成を目指し、「滝川どうぶつランド」での活動を行った。

表1 実施日程

回	日時	グループ															
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
1	4月2日	総合演習開設の背景とその目的、計画の概略説明、自然体験アンケート調査															
2	4月16日	種(カリフォルニアポピーの種)、土(200g)、ポット(一人12個)の分配、種まき後の発芽の様子の説明、発芽観察日記の説明と昨年度の優秀作品の紹介															
3	4月23日	中庭花壇にビオラの苗の植え付け															
4	4月23日	花壇のチューリップの移動															
5	5月21日	押し花便箋作り															
6	5月21日	押し花はがき作り															
7・8	5月28日	担当花壇分け、雑草取り、苗(ペチュニア、カリフォルニアポピー)の植え方説明、水やり															
9・10	6月4日	畑おこし、枝豆の種まき、雑草取り、カリフォルニアポピーの中庭からの移植、水やり															
11	6月11日	花壇整備(草取り、カリフォルニアポピーの中庭からの植えかえ)															
12	6月11日	押し花づくり															
13・14	6月25日	キャンプ実習オリエンテーション															
15	7月2日	キャンプ準備															
16	7月2日	キャンプ準備・花壇除草作業															
17・18	7月3日	動物ランド															
19～28	7月11・12日	キャンプ															
29・30	7月16日	動物ランド押し花カード礼状作り															
31・32	7月23日	押し花礼状作り															
33・34	7月30日	押し花コンテスト作品作り															
35	10月29日	活動後調査、花壇片づけ															

(2) 活動の目的

活動の目的は、将来保育者になることを想定し、就職後必ず体験するであろう園外保育(社会見学、散歩、遠足、戸外遊びなど)と小動物の飼育を計画的に取り入れ、指導計画案を含めた保育の方法を体験的に学習することにある。具体的には、以下の2点を目標とする。①幼稚園教育要領における第2章「ねらい及び内容」と第3章「指導計画及び教育課程に係わる教育時間終了後に行う教育活動などの留意事項」、保育所保育指針における第3章「保育の内容」と第4章「保育の計画」を実際に園外保育の下見を通して指導計画立案すること。②幼稚園教育要領5領域の一つである「環境」の内容に示されている「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする」、「身近な物を大切にする」を体験的に学び、保育室や園外で飼育したいと思える小動物を専門家である飼育員の講話を聞きながら世話の仕方や餌の与え方について学び、また実際に動物たちと接することを通し

て、小動物飼育の方法をレポートとしてまとめること。

「滝川どうぶつランド」では、直接的に体験することにより身近な環境に触れ親しみ、学生自身が豊かな「心情」を大切に、動物たちとの触れ合いや科学遊び(シャボン玉、わたあめ作り、ロケット飛ばし、まとあてなど)の中でその不思議さ、おもしろさ、心地よさを学生同士で十分に味わい共感しながら、自らが興味や関心を広げ、環境に関わる「意欲」を高め、様々な発見や気づきの連続から保育の方法、幼児理解に関わる「態度」を養っていくことをねらいとした。

(3) 授業内容

幼児・児童教育学科幼児保育コース2年生全員(36名)を対象として2009年7月3日(金曜日)に「滝川どうぶつランド」を園外保育の下見と想定し、小動物の飼育レポート作成(動物のスケッチを含め、5種類の小動物についての報告)と園外保育の指導案(活動開始から昼食を含め園に戻るまでの日案作成)を課題として学生に課した。二つの課題達成のために当日は、動物のスケッチ、観察、飼育方法の学習、動物との触れ合い、科学遊び、餌やり体験、見学順路検討、園外保育の諸注意などを体験すべき授業内容とした。

6月18日(木)にはオリエンテーションを行い活動が受身にならないよう課題意識を持たせた。以下は日程、持ち物と活動の内容である。

①当日の流れ

時間	活動の内容	備考
9:15	バス出発(短大・学生玄関前)	※時間までにバスに乗車していること。
9:25	どうぶつランド到着	
	i 注意と園外保育下見のポイント、諸注意	※救急箱準備
10:00	ii 順路に沿って観察	
10:40	iii 自由に観察・動物のスケッチ	※生態を知ろう
11:00	iv 動物と触れ合う(ヘビ、モルモット、ウサギ、カメなど)	
	v 飼育担当者講話「小動物の飼育」	
	vi 科学遊び	
12:00	集合	※ゴミは各自持ち帰ること
12:05	バス乗車	
12:15	短大着 解散	
持ち物	飲み物、メモ帳、筆記用具、帽子(かぶってくること)、動物に餌やりをしたい学生は100円必要 黒阪教授の授業で作成したスケッチブック	餌：にんじん

②活動の内容

i 園外保育下見のポイントと諸注意

- ・園外保育時の保育者の心得

1) 下見は丁寧に。

「滝川どうぶつランド」内の遊具の扱い、トイレの場所点検、危険な場所確認、水飲み場、天候が急変したときの対応、往復の所要時間、昼食の場所確認と点検など。

2) 保育者が準備するもの

救急カバン、着替え、カメラ、お金、ビニール袋、ティッシュペーパー、帽子、敷物、携帯電話など。

ii 順路に沿って観察

- ・指導案作成を念頭に観察。観察時には時間の流れや見学順路などメモ。
- ・子どもたちへの配慮や注意すべき点をメモ。

iii 自由に観察

- ・レポートしたい動物の観察とスケッチ。
- ・飼育員に自由に質問。

iv 動物と触れ合う

- ・へび、モルモット、ウサギ、亀などと触れ合いその生態を知る。
- ・飼育員に生態や飼育環境など自由に質問。

v 飼育担当者講話「小動物の飼育」

- ・小動物の飼育方法。
- ・園外での飼育方法、狐やカラス対策。
- ・質疑応答。

vi 科学遊び

- ・身近な物を利用しての遊びを紹介。
シャボン玉、あめ玉からわたあめづくり、ペットボトルロケット、まとあてなど
- ・全員、遊びを体験。

(4) 反省点と課題

「滝川どうぶつランド」の活動は前記の体験的学習を半日で行ったのだが、内容は計画の段階で分刻みの流れになっており内容過多と思えた。しかし、学生たちの行動は時間配分や順路、動物たちとの触れ合いなどを通して観察したところ、譲り合う、順番を待つ、流れを

自分たちで自由に組み立て直すなどして、それぞれが調整し合い展開していた。「次、どうするの?」という主体性のない学生はなく、課題を意識して行動しつつも、童心に戻り楽しむことができていた。

また、事前に授業の中で意識して取り入れていたこととして、一つ目に1年次から取り組んでいた絵本の読み聞かせや図鑑を通して、小動物への関心と飼育を高める学習がある。この取り組みはおおいに役立ったが、生態については2年次の6月から講義室の壁に「へび」「モルモット」「うさぎ」「にわとり」などの説明図を展示しておいたが、細かく説明を加えるところまでできなかったため、今後の課題としたい。展示に対して興味と関心を高めた一部の学生はメモや写真をとったり、絵本や図鑑を読み返したりなどして課題である小動物飼育レポートの参考にしていた。

二つ目は園外保育を意識して、5月に目的地は違うが散歩(滝川市立図書館まで、片道35分)の体験をさせた。信号機の渡らせ方や手をつないで歩く、保育者の配置、車道への気配りなどを学生に学ばせ「滝川どうぶつランド」の指導計画案作成に備えたが、身近な自然(草原)、駐車場への配慮や遊んだ後の片付け(元に戻す)など子どもを対象にした時、予想される子どもの姿が幾つか考えられることに気づいた。今後の課題とし事前授業に活かしたい。

参考資料として図1、2に活動中の写真を、資料1「コガネグモ」、資料2「滝川どうぶつランド」指導計画案を紹介する。



図1 どうぶつランド



図2 科学遊び

「フカダゲキ」

4. 参考文献
「ヤマト」出版、山崎マコト。女言葉、今藤光孝、アリゾナ、2003年4月、全一巻。
「おんなにこころの国」マコト・山崎「おんな」監修：杉浦久、編著：清水京子、有楽堂、
実業日本社、1986年12月、2冊。
「おんな」マコト・山崎、監修：山崎マコト、土師生佳子、千代田2年7月、110頁。
「マコト」不詳著、栗吉富、岩波書店、1982年7月、100+102頁。
大井川由起、大井川由起、監修：大井川由起、行政文化事務局、2003年9月、64頁。
「おんな」マコト、2007/07/02閲覧、http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%BB%

算計画案

時間	楽譜の状況	おぼえきれない子どもの活動	NO. (2)	保育者の関わり・配慮
0:15	お座り音楽「お座り」 ① お座り音楽「お座り」 ②	① お座り音楽「お座り」 ②	お座り音楽「お座り」 ③	お座り音楽「お座り」 ④
0:17	お座り音楽「お座り」 ③	お座り音楽「お座り」 ④	お座り音楽「お座り」 ⑤	お座り音楽「お座り」 ⑥
0:30	お座り音楽「お座り」 ④	お座り音楽「お座り」 ⑤	お座り音楽「お座り」 ⑥	お座り音楽「お座り」 ⑦
0:36	お座り音楽「お座り」 ⑤	お座り音楽「お座り」 ⑥	お座り音楽「お座り」 ⑦	お座り音楽「お座り」 ⑧
0:38	お座り音楽「お座り」 ⑥	お座り音楽「お座り」 ⑦	お座り音楽「お座り」 ⑧	お座り音楽「お座り」 ⑨
0:40	お座り音楽「お座り」 ⑦	お座り音楽「お座り」 ⑧	お座り音楽「お座り」 ⑨	お座り音楽「お座り」 ⑩
0:45	お座り音楽「お座り」 ⑧	お座り音楽「お座り」 ⑨	お座り音楽「お座り」 ⑩	お座り音楽「お座り」 ⑪

表2 キャンプ活動日程表

	時間	活 動	備 考
1日目	12:45	集合	点呼・搬入
	13:00	短大出発	スクールバスを利用
	13:30	到着	用具搬入
	13:40	開講式・設営作業	備品を確認しながら
	14:00	全体企画(仲間作りゲーム)	点呼
	14:40	学生企画	点呼
	16:00	夕食作り	
	18:00	夕食	夕食コンテスト・点呼
	19:00	片付け	
	19:30	企画(キャンプファイアー)	全体企画
	20:30	お楽しみ企画:班ごとの出し物	
2日目	21:30	消灯	点呼
	7:00	起床・朝食準備	点呼
	7:30	朝食	
	8:00	身支度(各自荷物整理)	
	9:00	野外観察活動(ハイキング・散策)	点呼
	11:00	集合・撤収作業	点呼
	11:30	アンケート記入	
	12:00	現地出発	点呼
	12:30	短大到着	
	13:00	閉講式・解散	

また、前年度の課題として、近隣の幼児・児童とその保護者を対象にした、野外活動体験プログラムを実施していくということも考えられたが、現状の日程では、学生自身がキャンプ活動を体験することで手一杯であり、親子を対象にしたプログラムは断念せざるを得なかった。



図3 食事作り



図4 ハイキング

4. 草花栽培活動

(1) 本年度の授業改善点

前回報告時より、学生の草花栽培活動において新たに再考すべき問題点が浮かびあがった。それらを踏まえてその後行った改善点は以下のとおりである。

- ①責任の所在をより明確にするため、班の人員をより少人数とし、1班3名の班構成とした(1班のみ2名)。
- ②一昨年度は種の扱いやすさから栽培種をルピナスとしたが、ルピナスは初年度の開花率が極めて低いため、学生は自分の栽培した苗の開花を見ずに卒業することとなった。そのため、昨年度より、蒔いた年に確実に開花するカリフォルニアポピーを栽培種として選定した。なお、栽培は班で行くと責任の所在が不明確となるため、今年度も昨年度同様に学生各自が花の種と培養土、ポット等を自宅もしくはアパートに持ち帰り、種を蒔いて苗を栽培し、その経過を観察絵日記にまとめて提出した。
- ③一昨年度は雑草について学ばせるため、学生に雑草を採取して押し花にし、その名前や特徴などを調べさせ、レポートを提出させた。しかしながら、押し花という点で考えると、雑草の押し花というのは学生の動機づけ、子どもに対する教育への応用、その後の学習の発展という点で不十分であった。したがって、昨年度より新たに、栽培している花を押し花にして、授業や学生生活で活用するという活動を導入した。たとえば、押し花を使った便せんを作成して、実習先への礼状を書く際に使用する、また、押し花はがきを作って、出身高校の先生宛てに学生生活の状況や就職先が内定したことを報告するなどである。さらに、学生の動機づけをより高めるため、作成した押し花はがきを、松本市の押し花はがきコンクール実行委員会が主催する「第15回押し花はがきコンクール」へ応募するという活動も取り入れた。
- ④花以外の栽培体験をするために、野菜として枝豆を栽培した。畑を起こし、肥料をまいて、枝豆の種を植え、それを収穫して、調理するという計画を最初にたてた。これは、近年教育界において重要視されてきている「食育」を授業の中で実践し、食生活の重要性を学生に意識させ、幼児教育に応用させるためである。調理実習の内容として教員が想定していたのは、東北地方の伝統的食べ物である「ずんだもち」である。
- ⑤花壇に植えたままとなっていたチューリップと水仙の球根の植えかえを行った。学生の中には植物の中に、種で育つ植物と球根で育つ植物があることを知らない者が少なからず存在する。実際に球根を掘り起こし、それを再度植えるという作業を体験させることで、チューリップや水仙が球根植物であるという知識を確実に定着させることができると考えた。なお、球根を掘り起こすのは2年生、その球根を植えるのは次年度総合演習を受講

する1年生とした。1年生に球根を植えさせたのは、実際に2年生になった春に自分たちの植えた球根が花開くのを見るという楽しみを味わわせるためである。

(2) 授業内容

草花栽培の場所は例年同様校舎前の道路脇の花壇と中庭の花壇であり、枝豆の種を植えたのは体育館玄関横の約6坪程度の畑である。なお、授業内容はほぼ例年と同じであるため、前回の報告時以降に新たに導入した押し花作りと押し花を活用した便せん並びにはがきの作成方法について今回は述べることにする。

①押し花作り

様々な種類の花を押し花にすることは可能であるが、その後葉書や便箋に貼り付けることを考慮して、花はなるべく小さく、花びらの薄い花を採取するように指示した。その際、教員があらかじめ作っておいた押し花を写真にとり、スライドにして提示(図5)して、どのような花が適しているかを示した。また、学内に咲いている花の中では、ビオラやワスレナグサ、ツボサンゴなど中庭に植えてある花や鉢植えの花が最適であると説明した。なお、葉書を作る際には花だけでなく、葉も添えると見栄えがよくなることを付け加えた。

押し花作りでは、押し花を作成するための専用キットを使用した。押し花キットは押し花シート(F-301、260×360mm、草花を敷いてはさみ、張り付きを防ぎ、出来上がりの草花を傷つけないようにした専用の紙)、乾燥シート(FK-208、180×265mm、1mm厚、電子レンジやアイロンで乾燥して繰り返し使用することができる)、クッションペーパー(小)(F-311、180×260mm、花の厚さに合わせた厚さのものを選択)、押し花板ベルト付(F-315、ベルトで固定するため、しっかりと圧力がかかり、携帯できるために採った場所ですぐに押し花が作れる)、ファスナー付き袋(FP-403、空気中の湿気を通しにくい特殊な密閉用の袋)から構成される。採取した花は根元でカットし、茎の水分が短時間で抜けるように、縦にカッ



図5 押し花に適した花の例

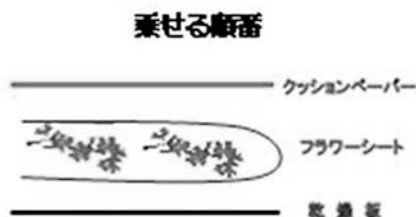


図6 押し花の作成手順の一部

ターで削ぐ。乾燥板の上に、フラワーシートを広げ、花や茎は重ならないようにその上に広げる。次に、押し花シートを折りたたんで、花を挟み、その上にクッションペーパーを置く。乾燥板、押し花シート、クッションペーパーの重ねる順番については、学生が理解しやすいように図を作り、スライドにて示した(図6)。この状態のものを順番に重ねていき、最後に押し花板で上下を挟んで、専用のベルトできつく縛り、専用のビニール袋に入れる。ビニール袋に入れるのは、湿気を遮断するためである。なお、押し花キットの数に限りがあるため、班毎に1つの押し花板とそれを入れる専用のビニール袋、各自に2枚の押し花シート、乾燥板、クッションペーパーを配布した。最後に、全班の押し花を集めて重ね、重石として多量の本をその上に載せる。こうして1週間ほどで押し花は完成する。完成した押し花は窓のついた台紙と乾燥シートの入った専用の保存袋(UA-2040)に保存し、退色や劣化を防ぐ。なお、保存袋は各班に1つずつ配布した。また、学生には、押し花を使用した作品として、押し花の額縁、しおり、カード、コースター、マウスパッド、コンパクトミラー、3名の教員が実際に作成したはがき等をスライドにて紹介した。

② 押し葉はがき及び便箋の作成



各自が採取した花から作った押し花を使用して、葉書と便箋を作成した。なお、はがきは押し花専用の葉書を使用した。この葉書は、葉書の上に糊のついたシートが既にかぶせてあり、そのシートをめくって、押し花を適当に葉書上に配置し、シートをかぶせて、それをラミネーターに通すと、シートが葉書に密着して押し花葉書が完成するというものである。なお、押し花を配置する際には、専用のピンセットを使用して、必要に応じて、押し花用の糊

も使用した。また、できあがった押し花葉書はシートがかぶさっているため、花が少しぼやけて見えるが、これは専用のクリームをつけることで、押し花をくっきり浮かび上がらせることが出来る。このクリームを塗るかどうかの選択は学生に任せた。しかし、クリームをつけると、後で文章を書く際に、文字が書きづらくなるという難点があることが判明した。

押し花便箋作りでは、まず各自が持参した便箋に押し花を配置する。次に、専用の糊のついたシートを花の形と大きさに合わせて、切り取り、糊のついた方を下にしてかぶせる。そうして、上からアイロンをかけることで糊が溶けて、押し花が便箋に付着する。糊のついた方がどちらかわからないで、糊のついた面を上にしてアイロンをかけたため、アイロンにシートをくっつけてしまう学生がいた。

出来上がった押し花はがきを使用して、学生は出身高校の教諭に学生生活の状況を報告する挨拶状を作成した。便箋は保育実習並びに教育実習後に各実習先への礼状を書く際に使用した。また、花いっぱい運動発祥の地・松本市で毎年実施している「押し花葉書コンクール」に出品するための作品も各自作成した。このコンクールは手作りの押し花とメッセージを添えた葉書を作成し、応募するというものであり、応募者の中から優れた作品には賞が送られることとなっている。ちなみに、「花いっぱい大賞」(1点)には賞状、5万円旅行券、並びにふるさと小包が贈呈される。なお、学生には、作成前にこれまでの入賞作品をスライドにて紹介し、どのような作品が入賞したかをあらかじめ知らせ、作品のイメージがわかりやすいように工夫した。学生個々人の個性の反映された作品が出来あがり、応募の結果、2名がコンクールに入賞した。なお、入賞した作品を上に表示した。

(3) 反省点と今後の課題

これまでの草花栽培では、学生に草花を実際に栽培させ、自然のもつ神秘さやその不思議さを体験させるとともに、地道な除草作業などの中で努力や忍耐を涵養するという目的もその中に含まれていた。しかしながら、この体験授業を継続実施した中でわかったことは、学生は活動の中に、例えばタンポポの花輪作りのような楽しい要素が含まれていると、授業内容に対してより肯定的評価をするということである。したがって、一昨年度より、地道な除草作業の割合を減じ(なお、今年度より花壇の掘り起こし作業は短大と密接な関係のある家主協会の方々に機械で行っていただいた)、そのかわり内容を保育の現場等にも応用しやすい、押し花作りを草花栽培と同程度の割合で授業の中に組み入れることとした。押し花は、葉書や便箋を作成して、お世話になった高校の先生方への近況報告を2回、実習先への礼状などで3回、押し花コンクールへの出品など、合計6つの作品を作ったことで、十分に活用されたといえよう(草花栽培を担当しない教員も、カード作成に押し花を使用した)。しかし

ながら、その他の活動を含めいくつか今後改善すべき問題点も同時に浮上した。

第一に、押し花ははがきや便せん等に活用したが、これらはすべて他の人へ送ってしまったため、学生個人のもとには残らない結果となった(ただし、幸いにして学校として押し花コンクールに応募したため、応募作品は返品された)。学生に記念として残り、かつ芸術的要素の高い作品を作成する活動を導入することが今後の課題としてあげられる。たとえば、コースターやしおりなどの作成を取り入れることもその選択肢となろう。

第二に、押し花活動に多くの時間を割いたために、例年行っている、植物についての授業や、雑草調査、花の種の採取、花輪作りなどの体験活動を時間的都合により実施することができなくなった。一つの活動に多くの時間を振り分けるよりも、時間配分を考え、より多くの内容を授業内に盛り込むことが今後の課題となる。

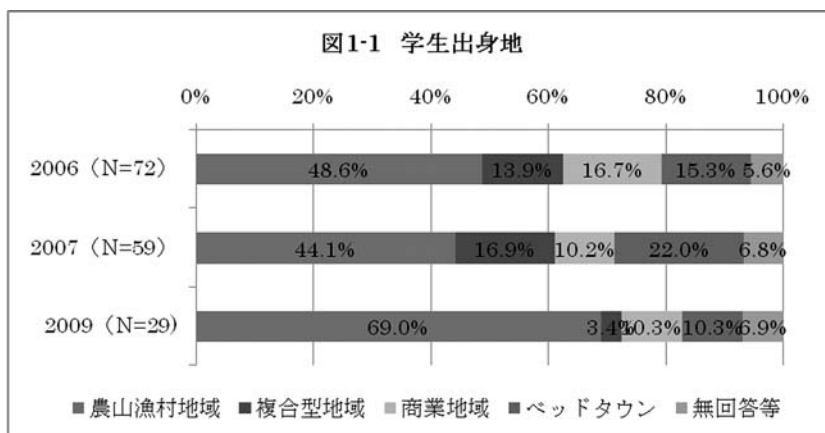
第三に、草花栽培以外の活動として、食育体験をさせるために、枝豆の種を植えた。しかし、以下の理由によりその後の授業内容を中止することとなった。一つ目の理由は収穫の時期が学生の夏休み及び幼稚園実習の時期と重なったため枝豆を収穫することができなかったということである。しかし、枝豆をそのまま生育させると、大豆になり、大豆を収穫して調理するということも可能である。時期がずれても枝豆か大豆のどちらかを収穫できるのではないかと考えて、大豆を選んで植えたのである。しかし、後期の授業で大豆を収穫して活用するには、できた大豆の量が少なすぎた。これは、植えた全ての大豆の種が発芽しなかったためであるが、なぜ発芽しなかったのかを学生に考えさせるということを怠った。次年度は確実に収穫し、それを活用した調理実習を行い、学生に食生活の大切さ及びそれを子どもたちに教える術を考案させるという段階まで実施できるように計画を立てることが望ましい。

調査の結果と考察

(1) 学生の属性

ここで比較をするのは、2006年、2007年と本年度のデータである。対象となる学生数は2006年度が95人、2007年度が59人、2009年度が35人である。男女比は徐々に男子学生の割合が減っており、2006年が30.5%、2007年度が27.1%、2009年度が17.1%となっている。

自然体験という点において影響力が強いと考えられるのが、出身地の性質である。図1-1をみると、2006年度、2007年度の学生に対し、2009年度は農山漁村地域の出身者が20ポイント以上増えていることがわかる。出身地域の人口規模をみても、10万人以上の地域に住んでいたという者はひとりもおらず、37.9%は人口が1万人に満たない地域の出身者であった。



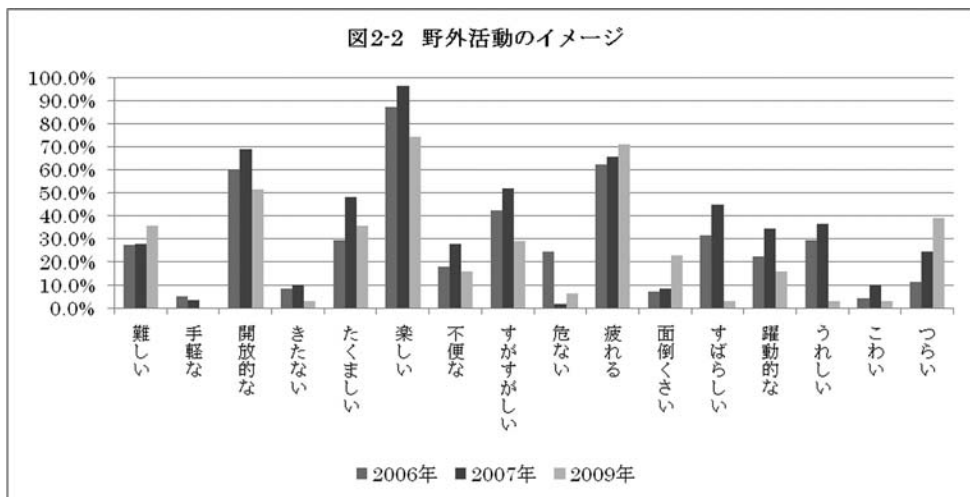
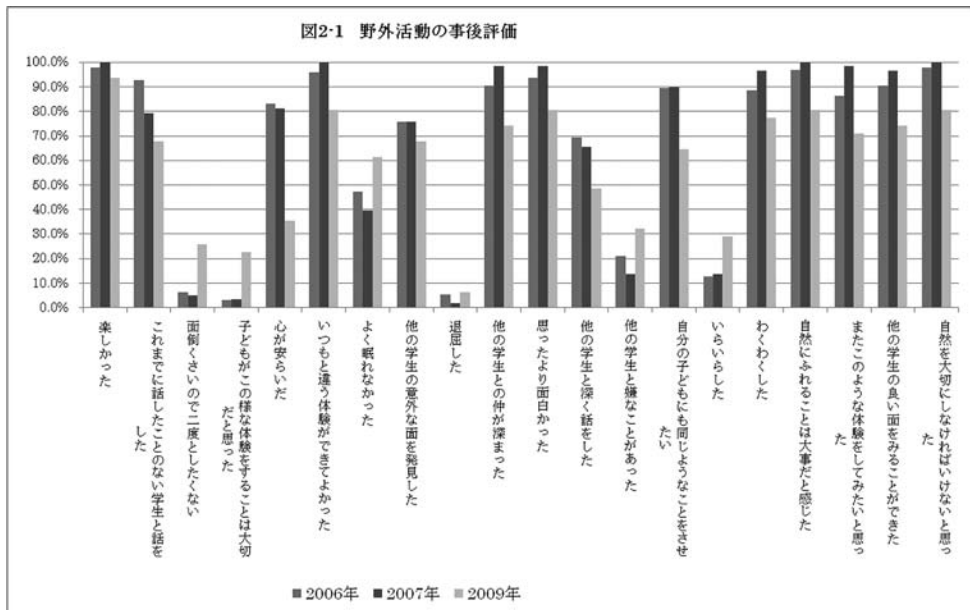
(2) 野外活動

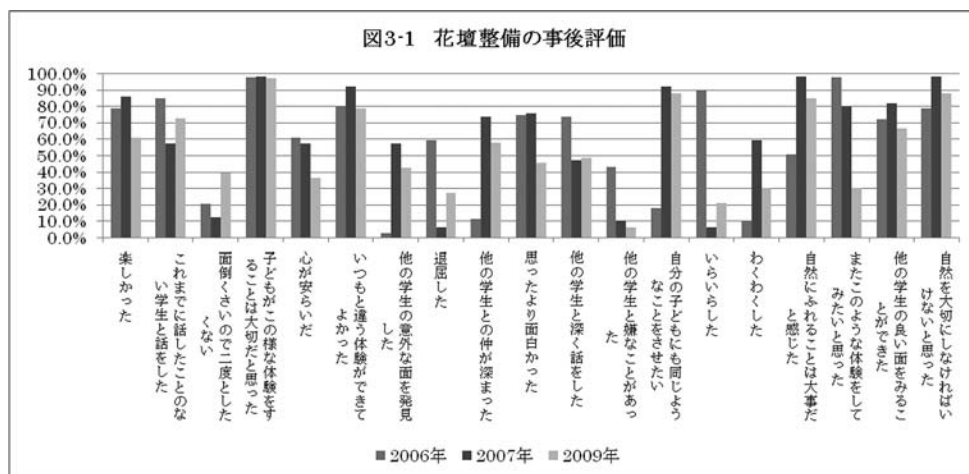
野外活動では、例年と比較して「面倒くさいので二度としたくない」「よく眠れなかった」「他の学生と嫌なことがあった」「いらいらした」など、マイナスな評価が増えている(図2-1)。キャンプ当日の環境などには、例年と大きな変化はなく、これをどのように評価するかは難しい。ただ本年は、子どもを引率するための活動であることをより強調し、事前指導も例年以上に厳密におこなったため、それらが学生たちにとっての重責となったのかもしれない。実際、野外活動のイメージをみると、「疲れる」のほかに「難しい」や「つらい」が増えている(図2-2)。

また、マイナス要因も多かったものの、全体としては「楽しかった」という者が93.5%いることから、「何よりもまず本人たちが楽しむ」という最も重要な点は満たされたものと考えられる。

(3) 草花栽培

草花栽培についても、「面倒くさいので二度としたくない」という者が増えている(図3-1)。ただ、それ以外の項目についてはプラスの評価もマイナスの評価も概ね減少している。これは、「草花栽培活動」として、草花栽培と押し花作りという2つの活動を並行して行ったことにより、学生の焦点が定まらなくなったのだろう。他の活動と比較して、楽しいなどの評価が低めにする草花栽培であるが、例年通り「子どもがこのような体験をしていくことは大切だと思った」「自分の子どもにも同じようなことをさせたい」という学生は際立って多い。自分の好みではなく、子どもへの影響を客観的にみて、有益な活動と判断されているという点において、最も総合演習の本義にあった活動であるといえるだろう。





(4) 総合演習全体への評価

どうぶつらんどにおいて動物と触れ合うという活動は、本年度初めておこなったものである。したがってこれまでとの比較はできないため、他活動との比較で代替する。

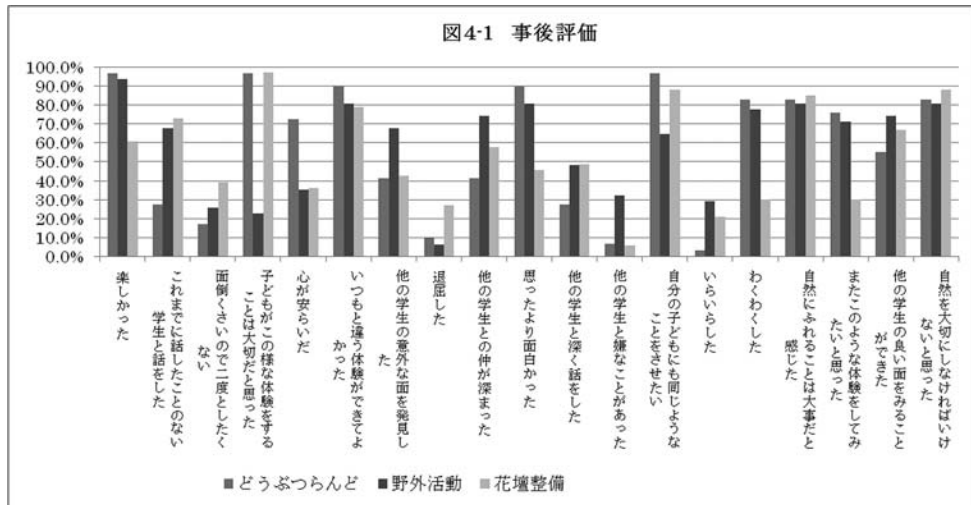
どうぶつらんどでの活動は楽しかったと評価する学生が3つの活動のなかで最も多くなっている。また、「子どもがこの様な体験をすることは大切だと思った」や「思ったより面白かった」なども多くの学生が感想としてあげている。全般にどうぶつらんどと草花栽培は同様の傾向を示しがちであり、いずれも自然の素晴らしさを教え、子どもへも体験させたい活動として認識されている。

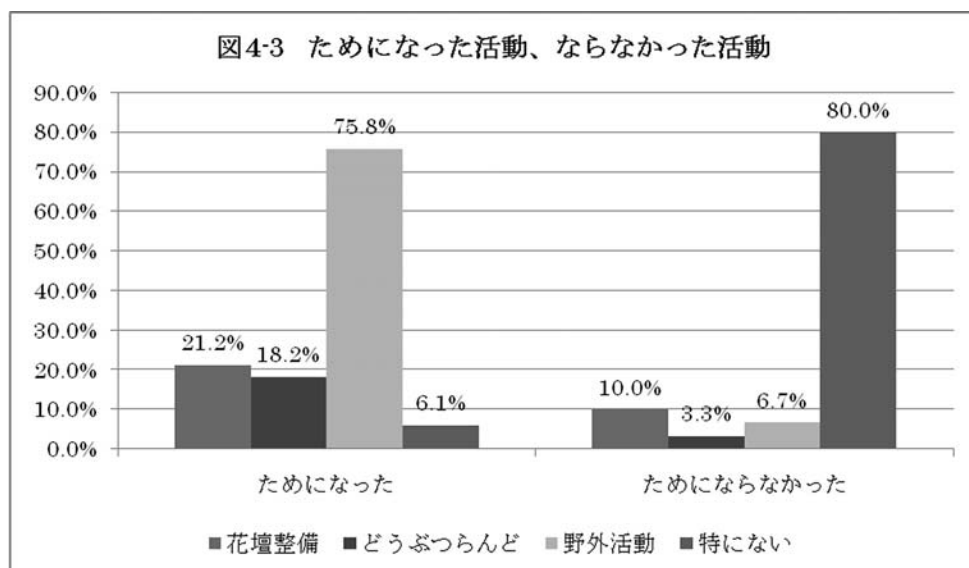
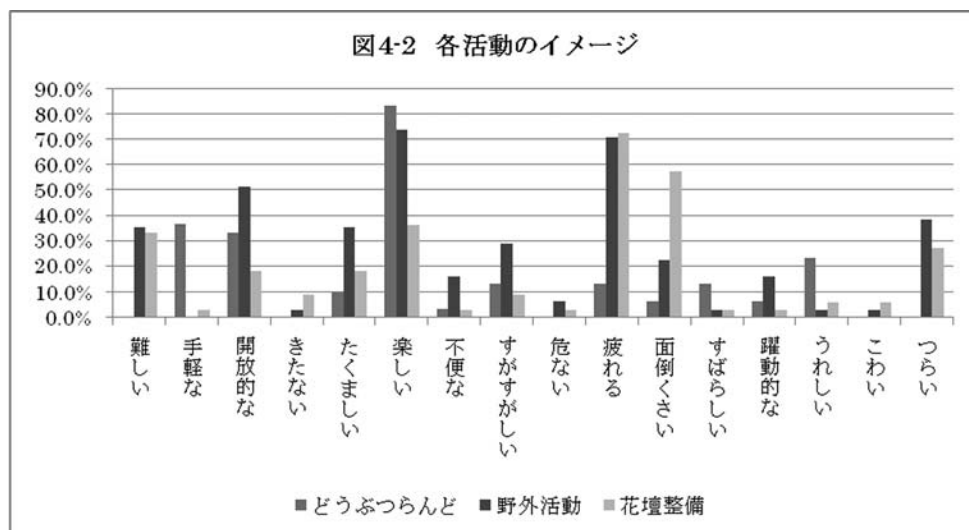
一方で野外活動は他の活動と比較してやや独自な評価をされているようである。学生同士の交流としては大きな役割を果たしたものの、子どもへ体験させる活動としての意義を伝えることがむずかしかったようである。

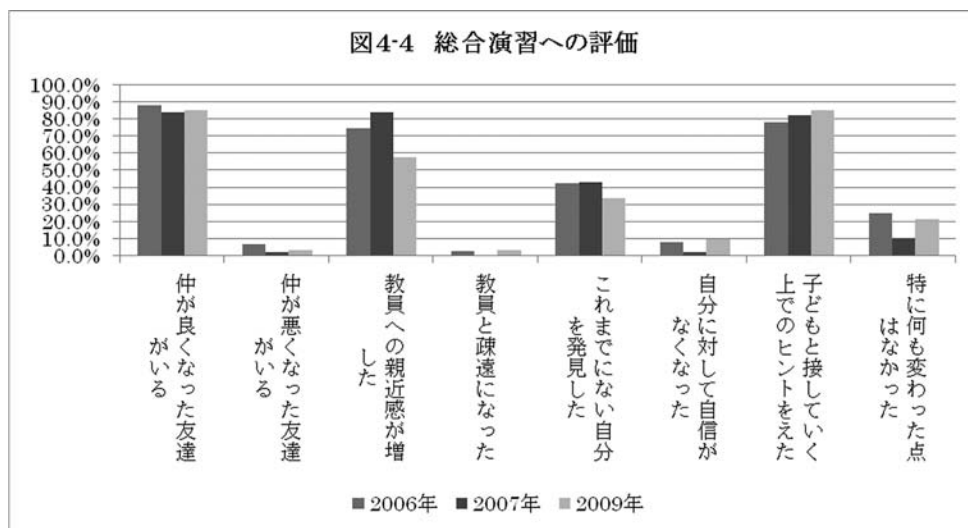
その反面、ためになった活動として最も挙げられているのもまた、野外活動であった。逆に、ためにならなかったと考えられているのは草花栽培が最も多い。ただし、最も多いとはいえ挙げているのは10.0%の学生だけであり、草花栽培がためになったと答えた21.2%より少ない。また、8割の学生はためにならなかった活動は特にないと答えており、総合演習全体へは一定の意義を見出していると考えられる。

最後に、総合演習全体への評価をみてみよう。おおよその傾向は2006年、2007年と比較してもあまり変わらない。そのようななかで、「教員への親近感が増した」と答えた学生が2007年の83.7%から本年度は57.6%まで減少した。本年度は全般に作業が多く、教員が丁寧な指導を行うことができなかったことがその背景にはあると考えられる。もちろん、総合演

習は教員への親近感を増すために行っているわけではない。しかし、総合演習が過去において学生の教員に対する壁を低くする役割を果たしていたこと、それが学生指導上、プラスの効果を与えていたと考えられること、そしてなにより、学生自身にとっても教員との信頼関係は、短大生活を円滑に送る上で有益であることから、総合演習を行っていく上でこの点は今後の課題とすべきであろう。







参考文献

- 足立美和, 石沢順子, 小笠原大輔(2009)保育士養成課程における「自然体験活動」に期待する効果, 共立女子大学家政学部紀要, 55, 73-88.
- 足立心一, 野崎剛毅, 草薙恵美子, 結城孝治, 松村澄絵, 松田由理子, 吉田充, 黒阪 陽一, 寺岡真知子(2007)総合的自然体験活動の授業実践とその検討(1) 國學院短期大学紀要, 24, 15-57.
- 足立心一, 野崎剛毅, 結城孝治, 草薙恵美子, 黒阪 陽一, 松村澄絵, 吉田充, 松田由理子, 寺岡真知子(2008)総合的自然体験活動の授業実践とその検討(2) 國學院短期大学紀要, 25, 83-116
- 福田靖(2006) 森の幼稚園と環境教育のかかわり: 五感を使って自然を体験する, Visio, 35, 83-88.
- 伊原久美子(2009)愛媛県内の幼稚園における自然体験活動の実態調査, 日本野外教育学会第12回大会プログラム・研究発表抄録集, 115.
- 井上望(2009)小学校の自然体験活動についての研究- 宿泊学習の企画・運営に着目して-, 日本野外教育学会第12回大会プログラム・研究発表抄録集, 56-57.
- 岩本廣美(2001) 環境教育における体験活動の構成原理: 食文化に関わる内容を中心に, 奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要, 4, 1-14.
- 環境省(2009)環境白書 循環型社会白書／生物多様性白書 平成21年版- 地球環境の健全な一部となる経済への転換-, 日経印刷.

環境庁中央環境審議会(1999)これからの環境教育・環境学習-持続可能な社会をめざして-(答申)

国立オリンピック記念青少年総合センター(2006)青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書平成17年度調査.

向後佑香, 岡村泰斗, 大橋久美子, 高瀬宏樹(2009)小学校長期自然体験活動の効果とその要因-鹿沼市自然体験交流センターを事例として-, 日本野外教育学会第12回大会プログラム・研究発表抄録集, 52-53.

教育再生会議(2007)社会総がかりで教育再生を-公教育再生に向けた更なる一歩と「教育新時代」のための基盤の再構築-.

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku/houkoku/honbun0601.pdf>

前田正紀(2009)幼児教育における自然体験と保育者の資質-保育者養成機関における環境教育の視点から-, 仁愛女子短期大学研究紀要, 41, 81-88.

眞野恵委子, 田辺慎一, 永井将史(2009)幼児とその保護者における自然体験の現状-子どもの育つ環境による自然体験の違い-, キャンプ研究, 13(1), 32-33.

松本晶子, 釜本健司, 早石周平(2009)大学生への環境教育における自然体験活動の意義, 沖縄大学人文学部紀要, 11, 43-52.

文部科学省中央教育審議会(2005)子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について-子どもの最善の利益のために幼児教育を考える-(答申).

文部科学省中央教育審議会(2007)次代を担う自立した青少年の育成に向けて(答申).

文部科学省中央教育審議会(2008)幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)

森谷直樹(2009)自然体験活動が幼児にもたらす影響について, 文化女子大学室蘭短期大学研究紀要, 32, 26-43.

日本生態学会生態系管理専門委員会(2005)自然再生事業指針, 保全生態学研究, 10, 63-75.

西島大祐, 山根一晃, 細田成子, 田川悦子(2009)大学キャンパス内野外教育施設で実践する保育者養成を目的とした教育活動の効果と課題, 日本野外教育学会第12回大会プログラム・研究発表抄録集, 40-41.

能條歩(2009)自然体験活動を学校で!-学校教育における意義と留意点Q&A-, 北海道ふるさとづくりセンター.

重松敏則, 朝廣和夫, 西浦千春(2003)農林体験が青年の環境認識に及ぼす影響について, ランドスケープ研究, 67:5, 833-836.

自然体験活動推進協議会(2006)青少年の自然体験活動の充実に向けて-青少年の都市と農山

漁村の交流活動推進に関する調査研究事業, 自然体験活動推進協議会.

東方真理子(2005)幼児期における自然とかかわることの意味:「森の幼稚園」の教育と「環境教育」, 恵泉アカデミア, 10, 86-107.

山本裕之(2008)幼児キャンプの実践, キャンプ研究, 12(2), 3-9.